
どこにいても...

レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どこにいても…

【Nコード】

N5341J

【作者名】

レイ

【あらすじ】

伊勢崎高校1年の山口翼やまぐちつばさは親友の佐藤一輝さとうかずきと平凡な毎日を送っていた。

ある日、翼の家の隣に同じ1年生の三根葵みねあおいが引っ越してきた。葵が引っ越してきたことによって少しずつ変化する翼の生活。

どこにいても、人は人を好きでいられるのか？

現代の高校生の恋愛をテーマにしたラブストーリー。

運命の糸は、絶対に断ち切れない……

前日（前書き）

レイです？

初めて小説を書きます。頑張って書きますので、感想などたくさん聞かせてください。

では楽しんで読んでいただけると嬉しいです。

前日

ここは、伊勢崎町。山や海に囲まれた町だ。
都会って程でもないが、それでもまああの町である。

今は6月。6月と言えば春風と夏風が吹く、過ごしやすい季節である……はずなのだ……

ミンミンミンミン……

「……暑ちい……」

そう言って翼はラムネを片手に扇風機の横で寝転がっていた。

「なんだよこの暑さは……まだ6月だっつーの」

そう、毎年ならばこの時期はまだ扇風機も必要ないのだが、今年は違う。扇風機がなければ干物になってしまつくらいに暑い。

「翼？翼？……翼！？もう！休みだからってダラダラしすぎよ！ほら！暇ならちよっと買い物行ってきて。」

おう、何を言ってるんだうちの母さんは。どうやら俺を干物にしたらしいな。

「嫌だ。俺を干物にする気か？父さんか姉えちゃんに頼めよ。」

「父さんは今どっか行ってる。椿^{つばき}は友達と遊びに行ってるわ。」
椿とは俺の姉のことだ。

高校3年生で俺と同じ伊勢崎高校に通っている。

弟の俺が見ても、とてつもない美人だと思う。だが問題はその性格だ。

昔空手をやっていたせいかな、今の俺では喧嘩になったら1分でKOされてしまう。

「はあ、なら母さん自分で行けばいいじゃん。」

「何言ってるの！今日は家の片付けをしなきゃいけないの！ほら！さっさと準備しなさい！じゃないと・・・」

母さんはそれ以上言わなかったが大体の予想はつく。

なんで我が家の女どもはこんなに凶悪なんだ……

そう実は姉に空手を教えたのは、ほかでもない我が母なのだ。

つまり姉えちゃん以上に強い。〃俺死亡・・・

「分かった！！分かったから、それ以上は止めてくれ？？！！」

「よろしい。」

翼も喧嘩は弱い方ではない。むしろかなり強い。

だが母さん達は次元が違う。

「はい、これメモとお金。後帰りに谷口さんの所で饅頭を買ってきてちょうだい。」

母さんはそう言っただけで俺にメモと2000円を渡してきた。

「行ってきまゝす」

翼は自転車に乗ってスーパーに向かっていた。スーパーは20分ほど行った伊勢崎町の中心にある。

「やっと着いた……。えっと…大根・豚肉・人参・玉ねぎ、それから……。トイレットペーパー!？」

つておい!これじゃ帰り道かなりきついじゃねーか!

「よお!翼!」

「ん?……おお!一輝!」

そう言つて声をかけてきたのは俺の親友の佐藤一輝だ。さとうかずき

「何してんだよ、こんなところで?」

「うちの殺人兵器に買い物頼まれたんだよ?」

「あははは!まあ、あの人が相手じゃさすがの翼でも勝てないよな!」

「笑い事じゃねえよ……」

うん。本当に笑い事じゃない。

「何買うんだ?」

「まあ色々とな」

そう言つて一輝はメモを見てきた。

「へえ、結構あるな、　なあ翼？帰りお前んち遊びに行ってもいい？」

「んゝいいけど何で？」

「今俺んち母さんが友達と旅行中で、親父がお前の父さんとゴルフ行つてて暇なんだよ！」

何！？ゴルフだと？

あのヤロオ、息子がこんなひどい目にあつてるといつのに。

「じゃあこの荷物半分持つてくれよな！？」

「オツケー。んじゃさっさ済ませよーぜ！」

一輝はそう言うと言い物を手伝つてくれた。
そこまではいいのだから……………

「……一輝てめえ……」

一輝はずっとニヤニヤしている。

10分前……—

「翼！清算俺がしといてやるから自転車持つて来いよ！」

「そうか？悪いな！じゃあ頼むぜ。」

俺は一輝に2000円を渡し、自転車をとりに行った。
これこそが最大の過ちだった。

「一輝ゝ？悪いな清算頼んじやつて。」

「いいって！さあ、行こうぜ！」

そして俺達が歩き出して

「なあ一輝、そのサイダーどうしたの？」
「これ？ 買った！」

翼は少し嫌な予感が頭をよぎった。

まさかな……

翼は恐る恐る聞いてみた。

「どこで？」

すると

「スーパーに決まつつんじゃん！ はい、レシート。」

そのレシートを見るなり翼の頭の中は真っ白になってしまった。

そして、そんな様子を一輝は横で爆笑していた。

「あはははは！、やべえ、翼、その顔ウケル！」

こいつ……

今すぐ殴りたい。

だが、そんなことよりも帰ってからの言い訳と、それが通じなかった場合のことを考えると、恐ろしくて、そんな考えすぐに消えてしまった。

そして今に至る――

「なあ…一輝・・・お前はうちの殺人兵器の破壊力を知らないのか？」

「知ってるに決まってるじゃん！」

こいつ……確信犯か

こうなつた以上、黙って帰すわけにはいかない。家に来て説明をしてもらわねば。じゃないと命に関わる……

「大丈夫だつて。ちゃんと俺が説明してやつからさ！」

前にも一度こういうことがあったのだが、その時はコイツは何も説明せずにとんずらしゃがつて、母さんにプロレス技を掛けられて死にかけた。

「今回はとんずらさせないからな」

「あつ！やべ！饅頭買うの忘れてた」

「饅頭つて谷口のばあちゃんのところか？あそこの美味しいもんな。急がねえと売り切れんぞ？」

谷口とは俺のクラスメイトだ。そのばあちゃんが饅頭を作っていて、母さんの大好物なわけだ。

つまり、ここで買いそびれたら帰った瞬間にジ・エンドなわけだ。

「一輝!!ここで待ってる!!すぐに帰ってくる!」

翼はそう言つと、一輝買い物袋を渡し自転車で飛んで行った。
5分後、饅頭屋に着いた。

「おばちゃん!!いる?」

「あらあら、翼君じゃないかい。どうしんだい血相かえて?」

「おばちゃん、まだ饅頭ある?30個入りのやつ」

「ついさっき売れちまったよ。残念だったねえ」

マジか………終わった

「分かった。ありがとうおばちゃん」

「あつ翼君。ちょっとお待ち。……はい、饅頭の代わりにこれをあげるよ。」

おばちゃんは翼におはぎを2つとみたらし団子を4つ入れた袋を渡した。

「おばちゃんありがとう! また今度来るよ!」

「はいよ、じゃあね翼君」

……………これで許してもらえるのだろうか……………

翼は一輝のどこに向けて自転車を走らせた。

「どうだった？買ったか？」

「いや、無理だった。代わりにおはぎとかもらってきた」
「そっか、まあ帰ってから頑張るんだな。」

この頑張るには色々な意味がありそうだな

こんな話をしている間に家着いてしまった。

「……俺は未だかつて、これほどまでに玄関が凶悪に見えた
ことはない……」

神様どうかお守り下さい

翼は家に入る前に神に祈りを捧げた

「ただいま」

「おじゃまします」

声を聞いた母がリビングからやってきた。

「あら、一輝君いらっしゃい。ゆっくりしていいね」

「はい、おじゃまします」

翼は母さんに買い物とおはぎが入った袋を渡し、逃げるように一輝を連れて部屋に戻った。

——ガチャ

部屋に入るなり、一輝は遠慮なくテレビを、俺はベッドで絶望に触れていた。

——トントン——

「おやつ持ってきたわよ」

母さんはさっき翼がもらってきたおはぎと団子を部屋に持ってきた。

「ありがとうございます」

「いいのよ、ゆっくりしていいね」

翼は部屋を出る母をチラッと見たが、その顔は笑っていた。

翼の背中を冷たい汗が流れた。

「翼、大乱闘しようぜ」

もういいや
なんとかなるだろう

やる、と返事をして翼はゲームキューブを繋ぎ、起動させた。

「翼！賭けようぜ！ 勝ったら1つおやつを食べるってのはどうだ？」

一輝は賭け事が好きなのだ。以前に学校で5人くらいで大富豪をやったら、一人で千円も儲けやがった。

「構わねーけど手加減なしだぞ」

「当然！じゃあ始めようぜ」

翼はマリオを

一輝はフォックスを選んだ。

ドカーン!!

フォックスの強烈なキックがマリオを捉えた。

「よっしゃ！俺の勝ち！んじゃおはぎ貰っぜ」

一輝はおはぎを手に入れ上機嫌だ。

「うんめえゝさすがだなこの味は」

「うるせゝさつさと食べて次やつぞ！」

ドカーン！

また翼が負けた。

「よっしゃ！また俺の勝ち！おはぎ2つ目頂きます」

「ちよつと待て！2つはいきすぎだ！団子を食べ団子を！」

「知らね 俺勝ったし」

「あつ！待て……………くそお一輝覚えてろ…！」

結局……………

「翼！ごちそうさん、うまかった！」

「黙れ……………」

翼は団子一つしか食べることができずに、後は全て一輝に食べられてしまった。

「じゃあそろそろ俺帰るから」
「おうおう、さっさと帰ってくれ！」

ん？
何か忘れてないか俺

！！しまった
気付いたときにはすでに遅く、一輝は外から親指を立てながらニヤニヤしている。

翼が現実を理解した瞬間だった

「翼、ちょっといらっしやうい」

そらきた

腹をくくって下に行った。そこには恐ろしい程に笑顔の殺人兵器が待ち構えていた。

「翼、何で呼ばれたのか分かってるわね？」

はじまった

これより本当の大乱闘がはじまった

「はい分かっておりますお母さま。」

「お饅頭はともかくとして、このレシートのサイダーって何かしら？」

「そつ！？それは一輝が勝手に買ったんだって！！俺が買うわけねーだろ！！」

「ふうーん、一輝君がねえ……あの子がそんな事するとは思えないしねえ……。」

そんなことする子だよ母さん！母さんはあいつの正体を知らないんだよ！

「本当だつて？？信じてくれよ??」

「どうしようかね」

ダメだ、全く歯が立たない。

母さんはずっとニヤニヤして翼を支配している。

採決が下った

「翼！！夕飯抜きで刑と四字固めの刑どちらがいいかしら？」

一体何なんだこの母親は？

息子の生命な関わる事を平気で言い出すこの母親は何なんだ？

そして・・・。「あつ！待ちなさい翼！！」

翼の答えは・・・逃げる！そのときだった

「ただいま」

「げっ！！姉えちゃん！！」

なんと第2殺人兵器が帰宅してきたのだ！

「椿！ちよつと翼取り押さえて！」

「どけ！姉えちゃん！」

ドス！！

溝おちに見事な鉄拳が喰らった。

「なぐにしてんの翼！？」

「うつうぐ……姉えちゃん……何てことを……」

??

椿は状況を理解してないようだ。なのにさっきの鉄拳……酷い……

「椿おかえりなさい。後ありがとう！」

「たったただいま。何してんのお母さん達？」

母さんが事情を話だし、さらに……

翼ったら椿の好きなお饅頭も買い忘れたのよ
とまで言いやがった。

その瞬間姉えちゃんの目がハンターの目になったのは言うまでもない。

その後、我が家には翼の悲鳴が鳴り響き、夜も眠れなかったのだった。

明日に何が起こるかも知らずに・・・

第1話 出会い（前書き）

第1話 あらすじ

学校で昼食を食べようとしていると、一輝の幼馴染みの林田佳奈^{はやしだかな}が学年No.1人気かつ翼のあこがれの人物である岡本瑞希^{おかもとみずき}を連れて一緒に食べたいと言ってきた。

そして、学校帰りに一輝と一緒にマクドナルドに入ったが、そこで

……

第1話 出会い

・・・・・・・・やばいです・・・・・・・・

我が家の魔王から遊ばれて非常に寝不足です

——キーンコーンカーンコーン——

「山口！！また遅刻だ！！廊下に立ってろ」

「いや？先生！チャイムギリギリじゃないですか！セーフでしょ！」
「うるさい！つべこべ言わずに立ってろ！」

先生のこの一言で翼は廊下に立つはめになった
そして教室では笑いの渦が起こっている

遅刻じゃないのに……

「山口、教室に入れ、次に遅刻したら保護者呼ぶからな」
「はい、すみませんでした。」

保護者を呼ぶ？
冗談じゃない！

「翼！昨日はどうだった？」
「一輝！てめえのせいで殺されかけるわ、遅刻するわ最悪だぜ！」

これは高くつくからな！」

「あははは、分かったよ！何か考えといてやるよ」

そう言ってる間に1時間目の授業の数学が始まった。

言っておくが、翼は大の数学嫌いである

英語は得意なのだが、数学のように考えるものはどうも苦手なのだ。

——ス〜？…ス〜？…

「山口！起きろ！」

「…ん……はい？……」

「お前、この問題を解いてみる！」

は？

無理無理無理無理！

何？この問題？

えっと………………

「 $X \parallel 15$ です」

「……」

「山口」

「はい」

「廊下に立ってるか？」

「いえ？すいませんでした」

「ちゃんと起きてろ」

危ねえ

ここで立ってたりしたら終わってたな
先生ありがとよ」

キンコンカンコン——

「やつと飯かゝ！」

「一輝！どこで食う？」

「んゝ……あれ？」

一輝の顔がいきなりニヤけ出した。
だがその理由はすぐに分かった。

「ねえ、山口と一輝？よかったら私達も一緒にお昼食べていい？」

なんとクラスメイトの林田佳奈はやしだかなが一緒に弁当を食べようといいだしてきた。

いや、問題はそこではない。林田とは中学からの馴染みだし、一輝とは幼馴染みだからまだいい。こいつが現学年No.1人気かつ翼のあこがれの人である岡本瑞希おかもとみずきを連れてきたことが問題なのだ

「よかったな翼」

耳元で一輝がささやく。

こいつ……まさか……

「えっと……3組の中島瑞希です……よろしくね」

おお、軽い合コンみたいな感じになってますなあ

ちなみに伊勢崎高校は1学年200人程度で5クラスあり、一輝と翼は1組、佳奈と瑞希は3組である。

「あつ！佐藤一輝です。よろしく。」

「やつ、山口翼です。よろしく。」

何人かの周りの男子生徒の視線を感じるのは気のせいではないだろう……

「とりあえず飯食おうぜ！腹減って死にそう」

一輝が口を開くと、

「そういえば一輝達飲み物あるの？」

「いや、ないよ……あつ！じゃあ俺適当に4人分買ってくる」

一輝は頑張れ、と言葉を残して行ってしまった

そして林田はと言つと……

「ごめん、瑞希に山口。ちょっと電話かかってきたからトイレ行ってくるわね」

「おい、林田」

行ってしまった……

こいつら……狙ったな

・・・・・・・・・・

何だ？

この気まずい雰囲気は
みんなの視線が痛いぞ

学年、いや、もしかしたら学校No.1かもしれない女の子と昼食
なんてこの上ない幸せなのだが……
初会話、男どもの視線、これらの試練を越えられるか？

「えつと……飯食おうぜ」
小さく頷いて瑞希は弁当を開けた

「……佳奈達遅いね」
「あゝそうだな」

やべえ……緊張する……
「あはは、まるで二人にするためにしてるみたいだね！」

あはは、ホントにそのとおりかもしれませんな………ってか、こ
の子天然か？

「まああいつらは昔っから時間にはルーズだったからな」
「へー、そうなんだ……」

「ねえ……山口君ってさ、中学どこだった？」

「俺？伊勢崎中学だったよ。何で？」

「テニス部……じゃなかった？」

「そっだよ。えっ？何で知ってんの？」

「やっぱり！！私、北伊勢崎中学でテニス部だったの。中学最後の大会のシングルス決勝戦、すごい試合だったから後でトーナメント表見たら、山口翼と佐藤一輝って書いてあったから。……あっ！佐藤一輝ってもしかして……」

「そう、今ジュース買いに行ってる奴だよ」

嬉しい……

俺の事知ってたのか

嬉しすぎるぞコノヤロー

第1話 出会い（後書き）

登場人物を紹介していきます。

山口翼

伊勢崎高校の1年生。

まあまあかつこよく、モテるのだが、本人は気づいておらず、彼女もなし。

佐藤一輝

伊勢崎高校の1年生。

翼とは中学からの親友で、顔もよく勉強もスポーツも何でもできる完璧人間。女の子からも人気があるが、こちらも彼女はいいない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5341j/>

どこにいても...

2010年10月28日08時05分発行